

時事新報

137年前のきょう創刊

▲明治期の題字

明治15年3月1日、日本の言論界に一石を投じる新聞が登場した。福沢諭吉が創刊、自ら社説を執筆した「時事新報」だ。「不偏不党」を標榜し、西欧帝国主義の脅威を前に日本はアジアを離脱すべきだとする「脱亜論」を掲載するなど、日本の指針を激しく問い続けた。産経新聞はその時事新報の流れをくむ。創刊から137年。国際社会および東アジアで混迷が続く今こそ、時事新報として福沢の心意気に学ぶことが必要ではないか。福沢研究の泰斗、「新脱亜論」の自著がある拓殖大学の渡辺利夫学事顧問に聞いた。

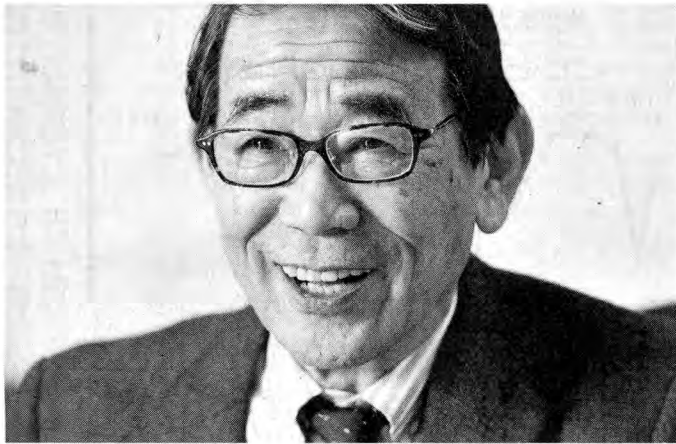
変わらぬ半島情勢

大局を見失わず、激しい言論を展開した福沢諭吉。彼は現在の国際情勢をどうみるでしょうか

「福沢が重視していたのの思いは 中国についての福沢は朝鮮半島です。地政学上、朝鮮半島はアジア大陸から日本に向けて突き刺すように伸びる一本の鉞で、その情勢は日本の運命を左右し、これは現在も同じです。韓国とは昭和40年の日韓基本条約で併合時からの懸案は『完全かつ最終的』に決着したはずが、元慰安婦問題を中心とした反日運動やいわゆる元徴用工訴訟での賠償命令など背信が続いている。拉致事件や核開発の北朝鮮も同様、『完全かつ検証可能で不可逆的な非核化(CVID)』など期待薄です。福沢だったら断固として糾弾するはずで」

明治15年 3月	創刊、本局は慶応義塾出版社に
17年 4月	社名を「時事新報社」に変更
30年 4月	ジャパントイムズ社とともにロイターと独占契約
34年 2月	福沢諭吉死去
35年 1月	日曜漫画欄で、北沢楽天が連載漫画を開始
38年 3月	大阪時事新報社を設立し、「大阪時事新報」を創刊
大正10年12月	「日英同盟廃棄」のスクープ
12年 7月	大阪時事新報社を営業不振のため、9月から独立会社とする
9月	関東大震災で社屋を焼失
昭和5年 3月	大阪時事新報社、神戸新聞社に買収され、同社系列会社化
11年12月	株主総会で会社解散が決定、25日付で終刊(21年元日付から復刊)
30年11月	産業経済新聞東京本社が「時事新報社」と合同、「産経時事」に改題
33年 7月	「産経時事」と大阪本社発行の「産業経済新聞」の題号を「産経新聞」に統一
平成30年 6月	産経新聞創刊85周年

アジヤ激変 諭吉の志、今こそ



拓殖大学学事顧問 渡辺利夫氏

時事新報 福沢諭吉が明治15(1882)年3月1日、「独立不羈、官民調和」を旗印に創刊した日刊紙。国際報道に力を入れ、30年4月からはロイター通信社と独占契約を結んだ。大正10年12月には「日英同盟廃棄」の国際的なスクープを報じている。その一方で漫画や天気予報など、当時としては斬新なコーナーで新聞の先鞭をつけた。その後、経営が悪化し、大正12年9月の関東大震災で社屋を失うなど決定的な打撃を受け、昭和11年12月に終刊。終戦直後の21年に復刊、30年11月に産経新聞と合同して「産経時事」となり、33年7月の改称で産経新聞に統一されて「時事」の名は消えた。

「わたなべ・としお」昭和14年6月、甲府市生まれ。慶応義塾大学経済学部卒、同大学院経済学研究科修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授から拓殖大学教授に。同大学長、総長を歴任して学事顧問に。平成23年に第27回正論大賞を受賞。28年から日本李登輝友の会会長。著書に「成長のアジア 停滞のアジア」(吉野作造賞)、「開発経済学」(大平正芳記念賞)、「西太平洋の時代」(アジア・太平洋賞大賞)、「新脱亜論」「士魂 福澤諭吉の真実」など。

「時事新報創刊直後の明治15年7月、開国政策など改革が進んでいた朝鮮を、清が軍事介入で後退させた『壬午事変』が起こりました。ここで福沢は、『東洋の攻略に牛耳る者は北京なり』と見極めたのです。ひどい状況の朝鮮を、宗主国として気ままに操っていたのが清です。国内に大きな矛盾を抱えながらも、世界に覇権を唱えようとする外交姿勢は現在の共産党政権でも一緒です。中国の傲慢を許した責任の一端は日本にもあります。文化大革命の礼賛、北京五輪まで続いた円借款などの膨大な対中援助、天安門事件での経済制裁のいちはやい解除などです。福沢だったら『徹底的に反省せよ』というでしょう」

国は人民の殻なり

「時事新報の創刊時は自由党の自由新聞や立憲改進黨の郵便報知新聞など、新聞といえは党の主張を伝えるメディアが中心でした。不偏不党は当時、異質です。この時期は国民の自由と権利を要求する自由民権運動が盛んで、新聞は賛同者を募る機関紙として『民権』に焦点を当てていました。しかし福沢は西欧帝国主義がアジアに着々と勢力を伸ばす情勢を踏まえ、『西力東漸』という自らの言葉で西列強の力が東に

押し寄せてくる危機を訴えました。福沢は時事新報の創刊の辞で『我日本国の独立を重んじて、畢生の目的、唯国権の一点に在る』と宣言しています。さらに『国は人民の殻なり。その維持保護を忘却して可ならんや(国民の維持と保護を忘れて国家といえるのか)』と呼びかけるなど、『国権』、つまり国民を統治する国家の力を強めなければ日本は立ちいかないと訴えました」

日本の意志見せよ

「脱亜論」は甲申事変の後に書かれました。それまで朝鮮、清と手を叩き合っていた西列強に對抗しようという『興亜』だった福沢が、甲申事変を経て『東亜の悪友を絶つべし』と脱亜に転向した。断腸の思いだったに違いない。福沢は「斯かる国人に対して如何なる約束を結ぶも、背信違約は彼等の持前にして毫も意に介することなし」と断じます。これは現在の韓国にも通じるのではないのでしょうか」

「福沢は日本の将来をどう論じるでしょうか。『福沢は外交について、弓を引て放たず満を持するの勢を張る』(国内で十分な準備をして機会を待つ)と表現しています。背景に国民の気力と兵力がなければ、国益をむき出しにする外国と交渉できるはずはありません。憲法を改正して日本の意志を見せよ、という福沢の声が聞こえてくるような気がします」

「福沢は明治17年12月の『甲申事変』で考えを一変させます。福沢が支持する自主独立を目指した開化派が政権を奪ったものの、清軍の介入でわずか3日で守旧派に奪還されてしまう。その後、開化派は処刑されるのですが、家族にもおよぶその処刑はあまりにも無惨なものでした。福沢は『朝鮮独立党の処刑』と題して『人間娑婆世界の地獄